

タイトル:平成 29(2017)年度 教育セミナー(第 13 回)

日時:2017 年 9 月 14 日(木)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室(303)

「南アジアにおける宗教的対立と共存の文化的基盤

— ベンガルの聖者廟におけるヒンドゥー教とイスラーム

外川 昌彦(AA 研)

本報告では、英領インドから独立後を経たベンガル地方における、異なる歴史的・社会的条件におかれた二つの聖者廟の事例を取り上げ、その対比的な分析を通して、多元的な宗教的実践が構成される条件を検証した。

第一の事例は、バングラデシュ・ブラフマンバリア県ノビノゴル地区サートモラ村のモノモホン・ドット廟であり、ムスリムが多数を占めるバングラデシュの聖者廟における、ヒンドゥー教徒とムスリムが儀礼実践を共有する状況が報告された。同時に、政府のイスラーム・ナショナリズム政策のもとで、バングラデシュ国内のマイノリティ・ヒンドゥー教徒が緊張に晒されている状況が指摘され、それが聖者廟の既存の宗教慣行の在り方にも様々に影響を与えている経緯が明らかにされ、地域社会の人々の相互理解が宗教的共生のひとつの条件を与えることが論じられた。

第二の事例は、インド西ベンガル州ノディア県のヒンドゥー教聖地マヤプルにおかれたチャンド・カジの聖者廟であり、ここではヒンドゥー教徒が多数を占めるインドにおけるムスリム社会の状況が論じられた。聖者チャイタニヤの生誕地として知られるヒンドゥー教聖地におけるヒンドゥー社会の言説が、マイノリティ宗教としての地域のムスリム住民への抑圧的な言説として作用している経緯が指摘され、それぞれの宗教的位置づけが、ヒンドゥー教聖地における歴史的・神話的な結びつきを通して説明されることで、個々の儀礼実践の正当性として主張されてゆく状況が論じられた。

本報告で取り上げた聖者廟における多元的な儀礼実践の状況は、歴史的な南アジア世界において、広く共有される現象である。たとえば、中世の宗教詩人カビールが良く知られているが、ヒンドゥー社会とムスリム社会を横断して支持される多様な宗教実践の事例は、既存の研究においても、「シンクレティズム」論や「宗教的寛容性」の議論などを通して、様々に論じられてきた。

本稿で取り上げる、第一の事例であるモノモホン廟もまた、ヒンドゥー教徒とムスリムとが互いの儀礼実践をひとつの聖者廟で共有する事例となっており、宗教紛争の絶えない南アジア社会という既存のイメージへの反証として、その有効性が指摘された。

しかし、南アジアの歴史を見ると、このような諸宗教の調和という言説とは裏腹に、様々な宗教対立が繰り返され、民衆の「寛容性」の伝統とは対極の状況が、めずらしくないことも事実であろう。第二の事例であるチャンド・カジ廟の事例においては、もともとヒンドゥー教徒とムスリムとが儀礼を共有していた状況が、ムスリム領主の庇護を失い、ヒンドゥー教聖地として地域の開発が進む中で、マイノリティのムスリム住民が様々な困難に晒されてゆく状況が報告された。

本報告では、以上の二つの聖者廟を対比的に検証することで、南アジアの宗教的共存に関わる既存

の研究を再検証し、このような現象を「シンクレティズム」として説明することの可能性と課題を論じた。また、大きな歴史動態にさらされた二つの異なる地域社会の事例の対比から、リチャード・イートンに代表される既存の「イスラーム化」論を検証し、マイクロ・ポリティクスとしての聖者廟における宗教的共生や対立を導く契機が検証され、「前近代」から「近代」への進化論的図式や、宗教的寛容性と排他性といった二項対立の図式を越えた、南アジア世界における宗教的多様性と共存の在り方を理解する、ひとつの可能性が検証された。